

大学運動部におけるキャリア意識と就職状況の比較に関する研究
ーフェンシング競技を事例にー
A Comparison of Career Conscious and Employment Situations
of University Athletic Clubs.
A Case study of fencers.

1K07B067-7 北川宗一郎
指導教員 主査：間野義之先生 副査：武藤泰明先生

1. 研究背景

オリンピックがギリシャ・アテネで初めて開催された1896年当時から行われている数少ない伝統的な競技の一つとして世界規模で発展してきたフェンシング競技。2008年の北京オリンピック、フェンシング競技において太田雄貴選手が日本フェンシング界初となる銀メダルを獲得し、日本国民全体のフェンシング競技認知度は飛躍的に向上した。しかし太田雄貴選手のような世界の一流トップの選手においても、オリンピックでメダル獲得をするまで決まった企業に就職する事ができず（現森永製菓所属）に競技を続けていたという現状が見られ、多くのメディアがこのようなマイナースポーツの現状を報道した事は記憶に新しい。

この例からも推測できる通り日本のトップアスリートを取り巻く環境は、経済の低迷、それに伴った企業採用数の衰退、社会人スポーツの縮小等様々な困難に直面している。その中でも多くの日本代表選手を擁する大学スポーツ選手が、進路や就職において不安を抱え現実に社会人として成功できない可能性がある事はスポーツ界発展において課題であると考えた。このような理由から、オリンピック代表や世界選手権代表選手等多くのトップアスリートを擁する大学運動部所属のフェンシング競技者を対象に、大学在学中のキャリア意識と就職状況の比較、分析を行い大学間における就職に関しての優位点、問題点を明らかにしたいと考えた。

2. 研究目的

国内の多くのトップ選手が集まる関東学生フェンシング連盟一部所属のフェンシング部員3年、4年生を対象に、キャリア意識、運動部運営内容、就職状況等を多角的な視点から比較、分析し、現状の優位点、問題点を明らかにする事を目的とする。

3. 研究方法

関東学生フェンシング連盟一部所属六大学を調査対象大学に選定し質問紙調査を実施する。質問紙調査により就職に直面する20～22歳（大学3、4年生）のフェンシング競技者が就職に関してどのような意識をもっているのかを明らかにする。また、就職率に差が出た二大学の代表者にインタビュー調査を行った。質問紙回答結果の分析・検証についてはSPSS、Microsoft Officeを用いた。

4. 結果

六大学間の基礎プロフィール、競技結果、キャリア意識に関して大きな差異は見られなかったが、就職率において0%の大学から75%の大学が存在し数値に差が出た。また、就職活動・進路に関する相談相手、就職阻害要因についても各大学に特徴がでた。

5. 考察

フェンシング競技においては、競技レベルが高い選手は卒業間近の2月まで競技に専念する。高い競技成績を求めれば求めるほど、就職活動の時期を失っているという傾向にある。そのような状況においても就職率の高い大学は存在し、就職率の高さに繋がると推測されるいくつかの要因がある事が明らかになった。F大学は、大学としてスポーツ推薦入学者に対し学校生活、単位修得に関するルールを作っている。運動部内においても就職活動を許容する雰囲気ある事や、OB・OGとの接点が多いという声が追加調査で行ったインタビューで聞く事ができた。運動部が持つネットワークをうまく活用しつつ、部全体が就職活動を行いやすい雰囲気作りを行い、大学側も競技者を留年させないようなルールを作る。この事がF大学の就職率の高さに結び付いていると考えられる。一方、就職率の低いB大学では4年で卒業する競技者が少なく、スポーツ推薦で入学した選手であっても学校生活、単位修得に関わるルールが存在していないのが現状である。加えて、OB・OGのネットワークも希薄であり、就職活動においてOB・OGの存在が役に立っていない事が明らかになった。時間的制約に加え、運動部の持つネットワークをうまく活用できていない事、学校生活においてルール作りがされていない事が就職率の低さに繋がっていると考えられる。

6. 結論

大学運動部では高い競技成績を求め集団生活を行い、試合に勝つ事に専念するので就職に関して積極的になるには難しい状況がある。ただ、類似した競技環境・生活環境においても、今回の調査対象の中で就職率の高かったF大学の運営には参考にすべき点が多くある。これからの運動部には、運動部内だけでなく、大学を交え包括的な運動部運営が重要となり、その運営が競技者のキャリアプランにおいて大きな役割を果たすと言えよう。